

イヴァン・ウルヴァロフ

## 公開レッスン&amp;レクチャーコンサート

～古典派からロマン派への音色と音楽の可能性～



出演者：イヴァン・ウルヴァロフ (Pf.)

日時：2019年3月21日(木・祝)

会場：赤坂ベヒシュタイン・サロン

**Iwan Urwalow**  
レクチャーコンサート  
Die Klangfarbe und musikalische Möglichkeit von Romantische Musik  
古典派からロマン派への音色と音楽の可能性

2019年3月21日(木・祝)  
3月22日(金)  
開演 15:00(前席は)  
ピアノ  
Iwan Urwalow(イヴァン・ウルヴァロフ)  
ピアノ指導者(イヴァン・ウルヴァロフ)  
C. Bechstein(ベヒシュタイン)

～program～  
ハイドン(1732-1809)  
ソナタ 第104番 Op. 113 No. 33  
I. Moderato  
II. Andante sostenuto (in F# major)  
III. Finale - Allegro  
ベートーヴェン(1770-1827)  
ピアノソナタ Op. 109  
チャイコフスキー(1839-1893)  
ピアノソナタ Op. 108  
グリーグ(1843-1907)  
ピアノソナタ Op. 10 No. 3  
ショパン(1810-1849)  
ワルツ 第18番 Op. 18 華麗な大円舞曲  
スケルツォ 第1番 Op. 9 No. 2  
スタニスラフ 第1番 Op. 31

チケット  
前席 5,000円  
前席 3,000円  
前席 2,000円  
前席 1,000円  
前席 500円  
前席 300円  
前席 100円  
前席 50円  
前席 30円  
前席 10円  
前席 5円  
前席 3円  
前席 1円

お問い合わせ  
TEL: 03-6441-3636  
FAX: 03-6441-3637  
E-MAIL: info@bechstein.jp  
URL: www.bechstein.jp

レクチャーの中では青柳さんの演奏法の解釈を裏付けるものとして、ドビュッシー自身が語った言葉がいくつか紹介されました。〈月の光〉の冒頭(譜例1)では、一般的には最上声部を強く出そうとする人が多いけれども、この場合そうではなく、すべての音が溶け合った響きとして聞こえるようにあえて上の音を強調しすぎないほうが良い、ということでした。このことはドビュッシー本人の「名ピアニストの(右手の)小指は不要だ。」という言葉にも裏付けられています。彼は「自分の音楽は全て旋律だ」とも語っており、ドビュッシーの和音は自然倍音列だけから拾われているので、すべての和音がきれいにハモるのです、と青柳さんは仰いました。ある時、ドビュッシーが「君の(作曲の)ものさしは？」と尋ねられると、「耳の喜びです。」と答えたそうです。ドビュッシーは偏屈でとてもこだわりのある人物だったと言われていますが、彼の残した言葉は多くが記録に残されており、そのおかげでこうして現在でもドビュッシーのピアニズムを知る上でたくさんヒントを得ることができるのは幸いだなと思いました。

## 譜例1. 《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉 冒頭部分

次に、三段譜での各旋律線のレベルの弾き分けについて、《映像第2集》より、第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉(譜例2)を例に、楔形(三角)アクセントとテヌートの弾き分け方について言及されました。三角(楔形)アクセントは、指を固めて重さはかけずに打鍵のスピードを速く、テヌートはゆつくりと打鍵、また3小節目に登場する最上部の旋律は、輝きを出すために、やはりこれも固い指で重さはかけずに弾きます、とのこと。

## 譜例2. 《映像第2集》より第1曲〈葉ずえを渡る鐘の音〉

続いて、1889年のパリ万博で展示されたブレイエルのモダンチェンバロに影響を受けたドビュッシーが、自身のピアノ曲にクラヴサン音楽の技法を取り入れた例がいくつか紹介されました。例えば、《前奏曲集第1巻》より〈ミントレル〉(譜例3)では、装飾音はチェンバロのイメージで前に出さず拍頭で合わせ、また両手の激しく交差するところでは指の関節の支えとバネが必要、と弾き方のコツを実演して下さいました。

## 譜例3. 《前奏曲集第1巻》より〈ミントレル〉

青柳さんが学生の頃のピアノ界は、大きい音でより速く弾くことが競われていた時代で、ドビュッシーなどは指の弱い人が弾くもの、と言う人も多かったそうです。もちろんそれは間違った認識で、ドビュッシーはショパンの弟子であるモーテ夫人の弟子でもあり、ショパンのピアニズムを受け継いでおり、むしろ指の強靭さが必要だと仰いました。他にも、ベヒシュタインとも絡めつつ、ドビュッシーのピアノ曲を弾く上でのコツを惜しみなくお話し下さり、フィナーレ企画に相応しい盛りだくさんな内容で、大変有意義な時間でした。(前田)

ドイツのカッセルムジークアカデミーで27年間教鞭を取っていらっしゃるロシア人ピアニストのイヴァン・ウルヴァロフ氏をお迎えしてレッスンとレクチャーコンサートを行っていただきました。今回が初来日だということです!ここでは、公開レッスンとレクチャーコンサートの様子をお伝えします。

ショパン:4つのマズルカOp.30の公開レッスンでは、全体として、細やかな感情の機微やキャラクターの違いを楽譜から読み取るような指導をされていたのが印象的でした。例えば、3曲目(譜例①)では、同じフレーズの連続で **f** と **pp**、**ff** と **pp** といった強弱記号が対比的に書かれているところが度々出てきますが、単なる音量の変化ではなく、勇気と不安、のように部分部分でどんな感情かということをはっきり決めると良いでしょう、とのことでした。最後の和音は、誇りを持った **f** で、とのアドバイスを受けて受講生がもう一度その部分を試してみると、実際にただの **f** ではなく誇らしげなたっぷりした **f** に変わり、ご本人もその解釈に納得された様子でした。続く、4曲目(譜例②)は1曲の中で常に変化に富んで、場面ごとに全く違うキャラクターにしましょう、と提案されました。冒頭は cis-moll の半信半疑な様子で始まり、会話のように。左のアルペジオはやや音が厚すぎなので、もっと軽く(leise)しましょう。曲の終わり(譜例③)は句点「。」ではなく、「?」と考えさせるような終わり方で、と実演しながら、ご自身も楽しそうに指導されていました。



## 譜例①:ショパン:4つのマズルカOp.30より第3曲 Des-dur

## 譜例②:ショパン:4つのマズルカOp.30より第4曲 冒頭